

梶井基次郎

交尾



交

尾

その一

星空を見上げると、音もしないで何匹びきも蝙蝠こうもりが飛んでいる。その姿は見えないが、瞬間しゆんかん瞬間光を消す星の工合から、気味の悪い畜類ちくるいの飛んでいるのが感じられるのである。

人びとは寢静ねしずまっている。——私の立っているのは、半ば朽くちかけた、家の物干場ものほしばだ。ここからは家の裏横手

の露路ろじを見通すことが出来る。近所は、港に舫もやった無数の廻船かいせんのように、ただぎっしりと建て詰つんだ家の、同じように朽ちかけた物干ばかりである。私はかつて独逸ドイツのペツヒシユタインという画家の「市に嘆なげけるクリスト」という画すりものの刷物を見たことがあるが、それは巨大な工場地帯の裏地のようところで、跪ひざまずいて祈いのっているキリストの絵像であつた。その聯想れんそうから、私は自分の今出ている物干がなんとなくそうしたゲツセマネのような気がしないでもない。しかし私はキリストではない。夜中になつて来ると病気の私の身体からだは火照ほてり出し、そして眼めが冴さ

える。ただ妄想もうそうという怪獣かいじゆうの餌食えじきとなりたくないためばかりに、私はここへ逃げ出にして来て、少々身体には毒よっゆな夜露よっゆに打たれるのである。

どの家も寝静ねじままっている。時どき力のない咳せきの音が洩もれて来る。昼間の知識から、私はそれが露路ろろに住む魚屋の咳であることを聞きわける。この男はもう商売つらも辛いらしい。二階に間借りをしている男が、一度医者に見てもらえというのにどうしても聴きかない。この咳はそんな咳じやないと云いって隠かくそうとする。二階の男がそれを近所へ触ふれて歩く。——家賃やちんを払はらう家が少なくて、医者いしやの

払いが皆目集まらないうこの町では、肺病は陰忍な戦である。突然に葬儀自動車^{そうぎ}が来る。誰もが死んだといふ当人のいつものように働いていた姿をまだ新しい記憶^{きおく}のなかに呼び起す。床^{とこ}についていた間というのは、だからいくらもないのである。実際こんな生活では誰でもが自ら絶望し、自ら死ななければならぬのだらう。

魚屋が咳^せいている。可哀想^{かわいそう}だなあと思う。ついでに、私の咳がやはりこんな風に聞こえるのだらうかと、私の分として聴いてみる。

先ほどから露路の上には盛^{さか}んに白いものが往来してい

る。これはこの露路だけとは云わない。表通りも夜更けになるとこの通りである。これは猫だ。私はなぜこの町では猫がこんなに我物顔に道を歩くのか考えてみたことがある。それによると第一この町には犬がほとんどいないのである。犬を飼うのはもう少し余裕のある住宅である。その代り通りの家では商品を鼠にやられないために大低猫を飼っている。犬がいなくて猫が多いのだから自然往来は猫が歩く。しかし、なんといっても、これは凶々しい不思議な気のする深夜の風景にはちがいない。彼等はブルヴァールを歩く貴婦人のように悠々と歩

く。また市役所の測量工夫のように辻つじから辻へ走ってゆくのである。

隣となりの物干の暗い隅すみでガサガサという音が聞こえる。

セキセイだ。小鳥が流は行やった時分にはこの町では怪けが我にん人まで出した。「一体誰がはじめにそんなものを欲しいと云い出したんだ」と人びとが思う時分には、尾羽おは打うち枯からしたいろいろな鳥が雀すずめに混まつて餌えを漁あさりに来た。もうそれも来なくなつた。そして隣りの物干の隅には煤すすで黒くなつた数匹のセキセイが生き残っているのである。昼間は誰もそれに注意を払おうともしない。ただ夜中に

なつて変てこな物音をたてる生物になつてしまつたのである。

この時私は不意に驚^{おど}ろいた。先ほどから露路をあちらへ行つたりこりこちらへ来たり、二匹の白猫が盛んに追っかけあいをしていたのであるが、この時ちようど私の眼の下で、不意に彼等は小さな唸^{うな}り声をあげて組打ちをはじめたのである。組打ちと云つてもそれは立つて組打ちをしているのではない。寝^ね転^{ころ}んで組打ちをしているのである。私は猫の交尾を見たことがあるがそれはこんなものではない。また仔^{こねこ}猫同志がよくこんなにして巫^ふ山^ざ戯^げ

が噛み合っている気味の悪い噛み方や、今彼等が突っ張
っている前肢の——それで人の胸を突っ張るときに可愛
い力やを思い出した。どこまでも指を滑り込ませる温か
い腹の柔毛——今一方の奴はそれを揃えた後肢で踏んづ
けているのである。こんなに可愛い、不思議な、艶めか
しい猫の有様を私はまだ見たことがなかった。しばらく
すると彼等はお互にきつく抱き合ったまま少しも動かな
くなくなってしまった。それを見ていると私は息が詰って来
るような気がした。と、その途端露路のあちらの端から
夜警の杖の音が急に露路へ響いて来た。

私はいつもこの夜警が廻まわって来ると家のなかへ這入はいつてしまうことにしていた。夜中おそく物干へ出ている姿などを私は見られなくなかった。もつとも物干の一方の方へ寄っていれば見られないで済むのであるが、雨戸が開いている、それを見て大きい声を立てて注意をされたりするとなおのこと不名誉ふめいよなので、彼がやって来るとそう家のなかへ這入はいってしまうのである。しかし今夜は私は猫がどうするか見届けたい気持でわざと物干へ身体を突出つぎだしていることにきめてしまった。夜警はだんだん近づいて来る。猫は相変わらず抱き合っただまま少しも動

こうとしない。この互いに絡み合っている二匹の白猫は私をしてほしいまま 肆ちたな男女の痴態を幻想させる。それから涯はてしのない快楽を私は抽き出すことが出来る。……

夜警はだんだん近づいて来た。この夜警は昼は葬儀屋そうぎやをやっている、なんとも云えない陰気な感じのする男である。私は彼が近づいて来るにつれて、彼がこの猫を見てどんな態度に出るか、興味を起して来た。彼はやっともうあと二間けんほどのところではじめてそれに気がついたらしく、立留った。眺めているらしい。彼がそうやって眺めているのを見ると、どうやら私の深夜の気持に

も人と一緒いっしょにもものを見物しているような感じが起つて来た。ところが猫はどうしたのかちつとも動かない。まだ夜警に気がつかないのだろうか。あるいはそうかも知れない。それとも多寡たかを括くくってそのままにしているのだろうか。それはこういう動物の図々しいところでもある。彼等は人が危害を加える気遣きづかいがないと落ち着き払って少しくらい追つてもなかなか逃にげ出さない。それでいて実に抜目ぬけめなく観察して、人にその気配けはいが兆きざすと見るとやたちまち逃げ足に移る。

夜警は猫が動かないと見るとまた二足三足近づいた。

するとおかしいことには二つの首がくるりと振向ふりむいた。しかし彼等はまだ抱き合っている。私はむしろ夜警の方が面白くなって来た。すると夜警は彼の持っている杖をトンと猫の間近で突いて見せた。と、たちまち描は二条の放射線となって露路の奥おくの方へ逃げてしまった。夜警はそれを見送ると、いつものようにつまらなそうに再び杖を鳴らしながら露路を立ち去ってしまった。物干の上の私には気づかないで。

その二

私は一度河鹿かじかをよく見てやろうと思っていた。

河鹿を見ようと思えばまず大胆だいたんに河鹿の鳴いている瀬せのきわまで進んでゆくことが必要である。これはそろそろ近寄って行っても河鹿の隠かくれてしまふのは同じだからなるべく神速に行うのがいいのである。瀬のきわまで行ってしまえば今度は身をひそめてじつとしてしまふ。「俺おれは石だぞ。俺は石だぞ」と念じているような気持で少し

も動かないのである。ただ眼めだけはらんらんとさせている。ぼんやりしていれば河鹿は溪たにの石と見わけにくい色をしているから何も見えないことになってしまうのである。やっとしばらくすると水の中やら石の蔭かげから河鹿がそろそろと首を擡もたげはじめる。気をつけて見ていると実にいろんなところから——恐おそる恐る顔を出すのである。すでに私じぐらいずつ——恐る恐る顔を出すのである。すでに私は石である。彼等は等しく恐怖きょうふをやり過ぎた体ていで元のところへあがって来る。今度は私の一望の下に、余儀よぎないところで中断されていた彼等の求愛が encore される

のである。

こんな風にして真近に河鹿を眺めてみると、ときどき不思議な気持ちになることがある。芥川龍之介あくたがわりゆうのすけは人間が河童かつぱの世界へ行く小説を書いたが、河鹿の世界というものは案外手近にあるものだ。私は一度私の眼の下にいた一匹の河鹿から忽然こっぜんとしてそんな世界へはいつてしまった。その河鹿は瀬の石と石との間に出来た小さい流れの前へ立って、あの奇怪きかいな顔かおつき附でじつと水の流れるのを見ていたのであるが、その姿が南画の河童とも漁師ともつかぬ点景人物そっくりになって来た、と思う間に彼の前

の小さい流れがサーツと広びろとした江こうに変じてしまった。その瞬間私もまたその天地の孤客こかくたることを感じたのである。

これはただこれだけの話に過ぎない。だが、こんな時こそ私は最も自然な状態で河鹿を眺めていたと云い得るのかもしれない。それより前私は一度こんな経験をしていた。

私は溪へ行って鳴く河鹿を一匹捕まえて来た。桶おけへ入れて観察しようと思ったのである。桶は浴場の桶だった。溪の石を入れて水を湛たたえ、硝子ガラスで蓋ふたをして座敷ざしきのなかへ

持ってはいった。ところが河鹿はどうしても自然な状態になろうとしない。蠅はえを入れても蠅は水の上へ落ちてしまつたなり河鹿とは別の生活をしている。私は退屈して湯に出かけた。そして忘れた時分になつて座敷へ歸つて来ると、チャブンという音が桶のなかでした。なるほどと思つて早速桶の傍そばへ行つて見ると、やはり先ほどの通り隠れてしまつたきりで出て来ない。今度は散歩に出かける。歸つて来ると、またチャブンという音がする。あとはやはり同じことである。その晩は、傍へ置いたまま、私は私で読書をはじめた。忘れてしまつて身体を動かす

とまた跳び込んだ。最も自然な状態で本を読んでいるところを見られてしまったのである。翌日、結局彼は「慌あわてて跳び込む」ということを私に教えただけで、身体へ部屋中の埃ほこりをつけて、私が明けてやった障子しょうじから溪の水音のする方へ跳んで行ってしまった。——これ以後私は二度とこの方法を繰返くりかえさなかった。彼等を自然に眺めるにはやはり溪へ行かなくてはならなかったのである。それはある河鹿のよく鳴く日だった。河鹿の鳴く声は街道かいどうまでよく聞こえた。私は街道から杉林すぎばやしのなかを通っていつもの瀬のそばへ下りて行った。溪向うの木立の

なかでは瑠璃るりが美しく轉さえずっていた。瑠璃は河鹿と同じくそのころの溪間をいかにも楽しいものに思わせる鳥だった。村人の話ではこの鳥は一つのホラ（山あいの木のたくさん繁しげったところ）にはただ一羽しかいない。そして他の瑠璃がそのホラへは行って行くと喧嘩けんかをして追いつて出してしまうと云う。私は瑠璃の鳴声を聞くといつもその話を思い出しそれをもっともだと思った。それはいかにも我と我が声の反響はんきやうを楽しんでいる者の声だった。その声はよく透りとお、一日中変ってゆく溪あいの日射ひざしの中なかでよく響ひびいた。その頃毎日のように溪間を遊び恍ほうけ

ていた私はよくこんなことを口ずさんだ。

——ニシビラへ行けばニシビラの瑠璃、セコノタキへ来ればセコノタキの瑠璃。——

そして私の下りて来た瀬の近くにも同じような瑠璃が一羽いたのである。私は果して河鹿の鳴きしきっているのを聞くとさっさと瀬のそばまで歩いて行った。すると彼等の音楽ははたと止まった。しかし私は既定きていの方針通りにじっと蹲うずくまっておればよいのである。しばらくして彼等はまた元通りに鳴き出した。この瀬には殊ことにたくさんさんの河鹿がいた。その声は瀬をどよもして響ひびいていた。

遠くの方から風の渡る^{わた}るように響いて来る。それは近くの瀬の波頭の間から高まって来て、眼の下の一団で高潮に達^{でんぱ}する。その伝播^{びみょう}は微妙で、絶えず湧^わき起り絶えず揺^ゆれ動く一つのまぼろしを見るようである。科学の教えると
ころによると、この地球にはじめて声を持つ生物が産れたのは石炭紀の両棲類^{りょうせいるい}だということである。だからこれがこの地球に響いた最初の生の合唱だと思ふといくら^{そうれつ}か壮烈な気がしないでもない。実際それは聞く者の心^{ふる}を震わせ、胸をわくわくさせ、ついには涙^{なみだ}を催^{もよお}させるような種類の音楽である。

私の眼の下にはこのとき一匹の雄おすがいた。そして彼もやはりその合唱の波のなかに漂ただよいながら、ある間まをおいては彼の喉のどを震わせていたのである。私は彼の相手がどこにいるのだろうかと捜さがして見た。流れを距へだてて一尺ばかり離はなれた石の蔭に温おと柔なしく控ひかえている一匹がいる。どうもそれらしい。しばらく見ているうちに私はそれが雄の鳴くたびに「ゲ・ゲ」と満足気な声で受答えをするのを発見した。そのうちに雄の声はだんだん冴さえて来た。ひたむきに鳴くのが私の胸へも伝つたえるほどになって来た。しばらくすると彼はまた突然に合唱のリズムを紊みだし

はじめた。鳴く間がだんだん迫^{せま}って来たのである。もちろん雌^{めす}は「ゲ・ゲ」とうなずいている。しかしこれは声の振^{ふる}わないせいか雄の熱情的なのに比べて少し呑^{のん}気^きに見える。しかし今に何事かなくてはならない。私はその時の来るのを待っていた。すると、案の定、雄はその烈^{はげ}しい鳴き方をひたと鳴きやめたと思う間に、するすると石を下りて水を渡りはじめた。このときその可^{かれん}憐^{れん}な風^{ふう}情^{せい}ほど私を感動させたものはなかった。彼が水の上を雌に求め寄^{あま}ってゆく、それは人間の子供が母親を見つけて甘え泣きに泣きながら駆^かけ寄^{あま}って行くときと少しも変わったこ

とはない。「ギョ・ギョ・ギョ・ギョ」
と鳴きながら泳いで行くのである。こんな一心にも可憐な求愛があるものだろうか。それには私はすっかりあてられてしまったのである。

もちろん彼は幸福に雌の足下へ到り着いた。それから
彼等は交尾した。爽やかな清流のなかで。——しかし少
なくとも彼等の痴情の美しさは水を渡るときに可憐さに
如かなかった。世にも美しいものを見た気持で、しばらく
く私は瀬を揺がす河鹿の声のなかに没していた。

（昭和五年十二月）

日本文学電子図書館

「梶井基次郎 ちくま日本文学028」

著 者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年11月10日 第1刷



日本文学電子図書館